

米芾『画史』考釈（七）

— 文房具 —

古原宏伸

はじめに

中国の北宋時代、十、十一世紀は、知識人の教養の理想としての詩書画三絶が、一人に具有兼備されることを目的とした高い境地が達成された時代、そして三絶を備えた文人が実際に輩出した時代でもある。¹⁾

そしてまた三絶を支えた文房具、中でも四宝とよばれる筆紙墨硯の四つを賞玩し、そのより高い品質を追求した時代である。四宝のうち最も愛されたのは硯である。文房趣味の端緒を開いた、宋初の蘇易簡(九五八―九九六)は、その著『文房四譜』の中で、

四宝は硯をもって首となす。筆墨紙は皆随時収取すべきも、終身ともに俱(とも)にすべきものは、ただ硯のみ。といい、107条に引く同時の愛硯家、唐詢はその著『硯録』の冒頭で、

予生まれて十五六歳、すなわち硯墨紙筆を篤く喜ぶ。四者の好は皆鈞(ひと)しきも、墨紙筆のごときは居常購求し、必ずその精なるものを得、ただこれらを取用すること乏しからず、終身愛すべきは独り硯のみ。

と蘇易簡と同じことをいっている。誰の眼にも一緒に映ることらしい。

同じことを青木正児先生はさらに詳しく述べておられる。

(文房) 四宝の中で最も欣賞されたのは硯である。他の三宝が皆消耗品であるのに比べて、硯は殆ど不動産的性質を持っているから、殊更珍重されるのである。これに次いで墨は貯蔵がきくし、古い物が愛玩される。紙も古いのがよいが、筆だけは新しくなくてはならないので、…そういう事情の反映であろう。硯と墨とに関する專著

が、先ず宋代において少からず現れた。：紙と筆とに關しては宋代に著書というほどのものを見ない。²⁾

米芾もまた右の大勢に同じである。紙については麻紙、白麻紙、觀音紙、澄心堂紙の四種の名稱をいうだけで、特別の立論はない。そして筆については皆無である。墨についても、ここに取り上げる107条にいう螺墨だけである。

一方硯については、この107条と、

161 徐熙風牡丹圖、：後易研与唐林夫。

との二条がある。(唐林夫の硯については後述) ただし、ここでは独得の議論の展開がある。

また天下の名品とうたわれていた南唐李後主旧藏の硯山は、もとより米芾の自慢の逸品だったのだが、潤州甘露寺の一隅の古家と交換に出される。彼の最後の居宅である。³⁾

『画史』中の紙、また硯山については、別に稿を改めることとし、ここでは紙数の制限からも、墨と硯だけにとどめたい。

『画史』の収める硯の記事は一条にすぎないが、彼には別に『硯史』の專著があつて、両者を対照すると、107条は『硯史』、中でもその末尾の「様品」九七〇字を要約したものと理解される。『硯史』は米芾の遺した業績の中でも最も重要な文献として清朝に入って尊敬されるようになるのだが、107条はそのエッセンスともいふべき形に凝結されている。難解さはその要約のしかたと字句の飛躍の大きさに、一つには原因があるのである。

107条も他の文章に劣らず、読解は困難を極める。中でも伝世、出土の晋唐宋硯と行文とを対照させ、修辭の一一を同定することが最もむずかしい。後に述べる跋(こう)はその一例である。

『硯史』の意義について桑行之は、

本書の論述はよく独り硯理を得、その歴代の製作の変は、考拋もつとも精確を極む⁽⁴⁾。

という。中田勇次郎先生はさらに語を費して、

かれが石を溺愛し、佳い石に出遭うと、帽子をぬいで礼拝したという逸話が伝えられているように、かれの石についての愛好を硯という部門について、精力を傾けてあらわしたものと見られる。……かれは硯の歴史を探り、古硯の実例を多くとりあげて、その流変を説いているのは、他の硯録に見られぬところである。……宋代には多くの硯譜があるが、その中でももっとも見識の高い好著と称すべきであろう⁽⁵⁾。

と絶賛されている。『硯史』並びに『画史』107の獨創性、獨自性については後述するが、『硯史』の史的位置にもかかわる、後世の評価について述べておきたい。

硯説、硯紀、硯考、硯譜の類は、宋以後、元明を経て清朝に至って激増する。書物としての分量という問題もあって、書名の数だけでは一概に断定できないが、前に引いた桑行之の編著『説硯』の目次によると、宋十三、元二、明六、清三十六であり、しかも『西清硯譜』二十四巻のような大部のものも一と数えていることを考えると、清朝の愛好の度は、歴代を断然圧している。

この硯をめぐる清朝の專著に目立つのは、米芾『硯史』からのおびただしい引用である。呉繩年『端溪研志』のよいうに「様品」全文を収録するもの、朱棟『硯小史』のように、米芾の原文を段落ごとに収載するもの、黄欽阿『端溪硯史匯參』のように註解を加えるなど扱いはさまざまだが、米芾を硯研究の大先達とし、その著作『硯史』を古典的名著の第一として崇敬することに変わりはない。これは『書史』『画史』には見られぬ傾向である。「慙惶人を殺す」(『書史』47、『画史』101)、「ああ叱ずかしい、こんな贖物を見せるなんて、このおれを殺す気か?」、こんな憎まれ口

をたたく文章には、どのような形でもまじめな書物にとって再録の道はない。だが、『硯史』に残る椰揄とペダンチズムは、まだ軽い方である。第一、書画の場合のように金銭の利害関係で人を傷つけることがない。優秀の品等だけで、硯には真偽の争論が少ないからである。

それと後世、米芾を硯の最高權威と認めて受容した背景には、米芾の芸術、人間の双方に対して評価が安定し、尊敬を集めるに至ったという事実があった。在世中は至る所で非難と反撥を買った奇矯な言動は、個性的芸術家にはありがちなことと、かえって興味本位に美化され、同時に書画の実力が客観的に評価されて、北宋を代表する一流の文人として、蘇軾、黄庭堅と並ぶ域にまで高められた。(米芾はそれを自負し、そうなることを熱望していた)。米芾『硯史』が歓迎された背景には、この共通の認識があったのである。

繰返していうように、『画史』107条は、清朝好事家の最も重んじた『硯史』の要約といってよい。精力を傾けた硯に関する彼の蘊蓄は、この一五〇字に凝縮されている。全体はほぼ等量に二分され、前半は晋唐古硯、後半は「本朝」宋硯の沿革について論じている。一〇七条の性格をこう規定して、考釈にとりかかりたい。

註

- (1) 島田修二郎「詩書画三絶」『中国書道全集』12 (元明1) 平凡社、一九五六
- 青木正児「隸家三絶」『中華文人画談』『青木正児全集』第六卷 春秋社、一九六九
- Michael Sullivan: The Three Perfections, George Braziller, 1940
- 村上哲見「南唐李後主と文房趣味」『中華文人の生活』平凡社、一九九四
- (2) 青木正児「文房趣味」『中国書道全集』12 平凡社、一九五六
- (3) 古原「顧愷之維摩」四八頁、「米芾画史考釈(一)」『奈良大学総合研究所報』第4号、一九九六

(4) 桑行之等編『說硯』「出版説明」 上海科技教育出版社、一九九四

この書物は、花園大学下野健児助教の示教と貸与によって閲覧できた。後に引く『西清硯譜』ともども、先生の御好意に心から感謝する。

(5) 「宋人硯譜十種、硯史」一〇八頁、『中田勇次郎著作集』第七巻 二玄社、一九八六

(6) 米芾「廷議帖」 「襄陽米芾在蘇軾、黃庭堅之間、自負其才、不入党与」

107 古書画皆圓、蓋有助于器、晋唐皆鳳池研、中心如瓦凹、故曰研瓦、如以一花頭瓦安三足爾。

墨称螺製、必如蛤粉、此又明用凹研也、一援筆、因凹製鋒已圓、書画安得不圓、

本朝研始心平如砥、一援筆則扁、故字亦扁、唐詢、字彥猷、始作嫩心凸研云、宜看墨色、每援筆即三角、字安得圓哉、

余稍追復其様、士人間有用者、然稍平、革嫩背未至於瓦、惟交一兩人、頓悟者用之矣。亦世俗不能發業也。

△校異▽ 『宝晋山林拾遺集』七、鳳池研、研瓦、凸研、本朝研、心凸研の各研をみな硯に作る。 『王氏書画苑』

のみ、明用凸研を明用凸硯に作る。他は諸本の間には異なる。つまり異なる文字は全くない。

古書画皆圓、蓋有助于器、晋唐皆鳳池研、中心如瓦凹、故曰研瓦、… 一援筆、因凹製鋒已圓。

古書画はみな圓、けだし器に助けらるるあり、晋唐はみな鳳池研、中心瓦のごとく凹む、故に研瓦という。ひとつた

び筆をとるや、凹製によって鋒はすでに圓なり。

古書画がどれも円いのは、(入矢先生訳、「丸味を帯びて、角ばっていないのは」器一硯のおかげである。晋唐はみな鳳池硯で、中央が瓦のようにへこんでいるところから瓦硯というのである。いざ筆を墨につけるとなると、硯がくぼんでいるから、墨はたっぷりと穂先きに廻って筆は円くなっている。

冒頭からして難解な提言を、彼は『書史』でも繰返している。

79 古硯心凹、所謂硯瓦、…筆至水即圓、古書筆圓、有助于器。

また清人に抄訳がある。

呂留良「天蓋樓硯述」「鳳池硯」 米元章云、唐鳳池、中凹受墨、故用筆一援墨飽、一而筆鋒已圓、作書無不如意。

さすがに筆鋒を圓(圓は圓と同じ)と云って、書画皆圓とまで踏みこんでいないのは、米芾の発想が飛躍していて、筆鋒云々のようには具体的に把握できなかったためだろう。以下個々の用語について検討を進める。

晋唐皆鳳池研

米芾「硯史」様品に、

鳳字の両足のごときものあり、独りこれはなだ多し、いわゆる鳳凰池なり。けだし以上は並びに晋製。晋人の図

画に見え、世俗呼んで風字となす。：頭純は直、微しく凸、書の鳳字のごとしとある。

鳳池は鳳凰池の略、『通典・職方典』に「中書省の地は枢近にあり、多く竜(天子)の任を承く。ここをもって人その位を固めて鳳凰池という」とみえる。硯に使うのは雅名である。

繰返して「鳳字のごとし」という風字硯は、図1でもわかるように、凡の字の外形からは鳳池硯とは区別できない。黄欽阿『端溪硯史滙參』下に、

葉交叔の端溪硯譜にいう、硯の形製、いわく平底風字、いわく有脚風字。

按ずるに、元章の説によるに、鳳字、風字はただ有足無足をもって弁となす、足あればすなわち鳳池、足なければすなわち風字。

実際には米芾は右のような「弁」、区別はいつてない。黄氏の創作である。現代でも有脚のものも風字硯とよび、鳳池、風字の両者は混同されている。

以下風字硯(または箕形硯)の三例を示す。図2は陝西省大荔縣南郷念橋村出土。ふちに沿って虫魚蔓草紋がある。また方扁形の両足がつく。図3も陝西省郊外の出土で、『文物』一九六四年第四期の解説には、広東省韶關市羅源洞山麓にある張九齡(六七三—七四〇)墓出土の、子の張拯の銘のある硯とよく似るとい^がうが、この方がはるかに質朴で古様に見える。盛唐開元年間の作例である。

図4は、広東省始興縣赤土嶺十三号墓出土の唐代風字硯で、米芾『硯史』「鳳池硯」にいう、左右のへりは斜めに削り、下方には刻みをつけて細工のあとを残さず、中央はくぼんで臼の形をしている。³⁾

とは、まさにこのような硯をさしているのだろう。

註

- (1) 国家文物局主編『中国文物精華大辞典』「金銀玉石卷・雜項編」 四四五頁、14
に図版がある。(上海辞書出版社・香港商務印書館、一九九六)
- (2) 『広東出土晋唐文物』79 二〇〇頁(広東省博物館・香港中文大学、一九八五)
- (3) 『硯史』の原文は、

右軍硯、…頂兩純皆綽慢下、不勒成痕、鳳池硯、…左右純斜刊下、不勒痕摺、
これに対し、清黃欽阿『端溪硯史滙參』下に註解がある。

按ずるに、これは晋唐北末の相伝の硯様なり。純とは辺なり、綽慢而下(原文に而はない)とは、寛綽緩慢にして下るなり、勒して痕を成さずとは、刀斫斧截の痕線あるに似ざるなり。

またヴァン・グリックの英訳は、訳者が全く理解できなかったことを示している。

The two rims at the top are without any decoration, nor is the lower part carved.

The brims on the right and the left are hewn into slopes.

(R.H. van Gurick: Mi Fu on Ink-Stones, Henri Vetch, Peking, 1938)

またグリックは黄氏とともに説郭本に従い、純斜の斜を「明らかな誤植」として純料とする。『端溪硯史滙參』下でも、同じく料に作り、不勒痕摺を不留痕摺に意をもって改める。

左右純料刊下、不留痕摺、

釈して「辺内坦坦として下り、痕線なきなり」という。誤まりである。

中心如瓦凹

「瓦のようにへこむ」とは、『硯史』にいう「臼を成す」と同義に相違ない。

『硯史』 今人右軍硯を収得するあり、…中は凹んで臼を成す、

また智永硯を収得するあり、頭はすこしく圓、また箕(み)の象に類(に)る、中も亦臼を成す。

箕の形に似るといふのは、図5の伝洛陽出土の紫石硯、図6の安徽省合肥出土の歙硯のようなものをさす。洛陽墓のものとは同形式の類品が多く出土し、合肥出土のものは早期歙硯の典型という。

『硯史』の「今人収得」とは、米芾その人のことらしい。米芾は時にこういう表現をするのである。

『書史』79 余収晋硯一、智永硯一、心如臼、

宋高似孫『硯箋』「智永硯」にも米芾といわず、右の再録がある。

「中心部が瓦のように凹んでいる」とは、この条の最も重要な論点である。現代では見ることのない、瓦のように凹んでいる古硯の実例が、陝西、湖南各省、洛陽市などの博物館に大量に収蔵されている。図7は「武定七年為廟造」の銘文と、伽陵頻伽の陽刻が背面にある。武定七年は、東魏孝靜帝、五四九年にあたる。西安東郊郭家灘工地の唐墓から出土。これなら図8の漢墓副葬品の臼と同じょうにくぼんでいる。図9は湖南省長沙仰天湖第七〇五号墓出土の青紫色の端石硯で、深さは二・七センチメートル、反りかえった姿と高い足がいかに威風堂々として古様である。

図10は、洛陽市機瓦廠で採集されたもの。泥質灰褐色で、全面に刀削の跡があり、使用された墨が残っているという。まさに瓦のようである。(『文物』一九六五年 第十二期)

前出の右軍硯については、米芾当時、二点が記録されている。いずれも風字硯という。

一つは王詵旧蔵で蘇軾に移ったもの。米芾の意見は、この硯の觀察に基いている。

『書史』79 王詵：右軍古鳳池紫石硯あり、蘇子瞻四十千をもって置往す。古硯、心凹、いわゆる硯瓦なり。今一つは自称王羲之の末裔が伝え、石揚休の購得したもの。

宋唐詢『硯録』 至和二年（一〇五五）

（余）右史となる。会稽の史の自ら王右軍の後という者、一風字硯を持して予に示す。大いさまさに尺余、石色は正赤、その理も亦細、これを用うるに端石に減せず、右軍用いし所の者という。果して然るや否やを知らず、後左史揚休錢二万をもってこれを購得す。

註

（1）石揚休、字は昌言（九九五—一〇五七）、仁宋朝の刑部員外郎、知制誥。賢臣として聞こえ、収集家として米芾と交渉があった。〔宋史〕三九九）

（2）高似孫『硯箋』『右軍硯』、宋李之彦『硯譜』『右軍風字硯』にともに同一記事の再録がある。

研瓦

瓦硯に同じ。郭忠『林泉高致』『画訣』に、

硯には石を用い、瓦を用い、盆を用い、甕片を用う。

とあるように、古瓦から硯を作ること、すなわち瓦硯については関心が高く、宋代にも多くの詩賦が残されている¹⁾、最も名高いのは、三国魏の都に築かれた銅雀台からの出土品である。

宋蘇易簡『文房四譜』三 芸能

魏の銅雀台の遺址、人多くその古瓦を発し、琢いて硯をつくる。甚だ工、水を貯えること数日滲まず、世に伝えている、「昔人この台を製するに、その瓦は陶人をして澄泥を繕給をもって濾過し、胡桃油を砕いて、ようやくこれを埴埴す」と。故に衆瓦と異なる。すなわち今の大名(河北)、相州(河南)の処の土人、古瓦状の硯を仮作して人に市(う)る者甚だ衆し。

宋唐詢『硯録』

古瓦硯は相州(河南)魏の銅雀台に出ず、里人よって土を掘り、往往これを得、断折のもの多し、瓦の色は頗る青く、その内は平瑩、今瓦の布文あつて厚さは及ぶあるに類せず、上に多く工人の姓氏を印す。八分は隸書に類(に)る。時に全きものを獲ることあり、工人よってその中を刃(けず)って硯となす、これ尤も得がたし：好事者その古物なるをもつてすこぶる愛重す。

宋何遵『春渚紀聞』九 「銅雀台瓦」

相州は魏武の故都なり、築く所の銅雀台、その瓦は初め鉛丹をもって胡桃酒に雜え、搗治してこれをやく。その滲まざるを取る、雨過すればすなわち乾くのみ。後人その故基において地を掘ってこれを得、鑑(けず)って研をつくる。

宋陸游『老学庵筆記』六

銅雀台の瓦は皆陽字、「建安十五年造」と紀す。(図11) 聞く、土人いう、瓦ははなはだ大、一片もて四硯を作るべしと。類書にいう、「鄴城の古瓦細潤玉のごとく、発しては筆を費さず、これ古の重んずる所のもの、今は絶無。鄴民偽造してもって遠方を給(あざむ)く、ほとんど用うべからず」と。

明陳繼儒「偃曝餘談」に、「類書云」を「鄴人有言」と変えて再録する。

宋袁文「鬻牖閒評」六

世に銅雀硯と称するは、ほとんど銅雀台の瓦もてこれをつくる。余武昌土俗編を観るに、安樂宮に載せて、呉王の城中に在りと。旧伝にこの宮中の古瓦は皆澄泥もてこれをつくる、硯となすべし、一瓦の値、錢一千文と。

これ古瓦の精緻かくのごときを知る、独り銅雀台の瓦のみ硯となすべからざるなり。

呂藍衍「鄴台瓦辨」(朱棟「硯小史」所収)

昔伝う、「鄴の瓦は皆金銀丹砂の属、陶成琢治して硯となす、愈薄く愈堅し、績膩廉密、発墨は筆に宜しく、燥(かわ)かず、金砂の性なお存すればなり」と。この説確かならず、鄴の瓦は十万をもつて計(かぞ)う。金銀丹砂を用うる費、まさに貲(あがな)えず、当時いまだ必しもこれをなさざらん。すなわち夸誕の者この説を作つて、人を欺くののみ。

中国の出土品の唐硯と比較すると、法隆寺献納宝物の瓦硯は、際立って異色のあるもので、中国には類例を見ない形状、作り方を示している。

図12は楕円形に木の枠を作り、深い傾斜から墨池を設ける。全面に黒漆を塗り、裏面にも朱漆地に黒漆を施している。図13は表面に渦状の押型文をつけ、背面には布目をつける。全体を湾曲させ、前方よりゆるやかな傾斜

を作っている。朱黒の漆でしあげるのは、前図のものと同じである。ふちや墨池のない点がいかにも古様である。もと猿面硯と呼ばれていた。

註

(1) 米芾の心凹硯、またこれにともなう滯墨の理論とは、真向から対立する意見がある。ただし、これは孤立した意見である。

宋邵博『聞見後録』二八

研瓦とは唐人の語なり。瓦をもって研をつくるをいうにあらず。けだし研の中、必ず隆起すること瓦の状のごとく、墨を留めざるをもって貴しとす、百余年後にはじめて平易なるべし、古人の用意、一研にすら尚かくのごとし。

(2) 黄庭堅「古銅雀硯銘」、梅堯臣「漢祖廟瓦硯、漢嬰廟瓦硯、東魏興和瓦硯」、吳融「古瓦硯賦」、韓琦「古瓦硯」、李琪「謝朱梁祖大硯瓦狀」、陳与義「酬錢柬之惠沢州呂道人硯」、蘇轍「缸硯賦」、晏殊「古瓦硯」、宋濂「銅雀瓦硯銘」、蘇軾「銅雀硯銘引」

(3) 『法隆寺大鏡』十一（南都十大寺大鏡第十一輯） 東京美術学校編、大塚巧芸社、一九三三

『法隆寺献納宝物』 東京国立博物館編、便利堂、一九七五

以一花頭瓦安三足爾

一花頭瓦をもって三足を安んずるのみ。

たとえば花頭瓦に三足をつけて、瓦硯を作るようなものだ。

花頭瓦

軒丸瓦の先端部分の円形、または半円形に開花文、蓮花文、菊花文、獸面文などの文様をつけた瓦当のこと、一に瓦頭ともいう。(図14)

図15は花頭瓦を使った瓦硯の例。背面の文字は「長梁未央」。朱棟の題記によると、

この瓦は尤も古くして潤、発墨は端(漢)に減ぜず、厚さは寸余、圍は三尺一寸、子香重甌をもってこれを得。瓦硯の冠となす。

という。

明曹昭『格古要論』七 明王子充「漢未央宮瓦硯記」に詳述がある。

未央宮は長安にあり、漢高帝七年、丞相蕭何の建つところ。宮中諸殿の瓦、その身半筒のごとくして簷際を覆うものなり、すなわちその頭、面の外向するあり、その面径五寸、圍一尺六寸強、四篆字あり、字はおよそ六等、一にいわく、「漢并天下」、一に曰く、「長梁未央」、…面より背に至る厚さ一寸弱、その背は平、墨を研すべし、唐宋以来の人みなこれを得ては、すなわちその身を去って、もって硯となす、故に俗に瓦頭硯と呼ぶ。或いはその質稍しく粗、また土に入ること歳久しく、頗る水に濁く。銅雀瓦硯に比して少しく劣ると。あに銅雀は精といえども、曹瞞の造る所、貴ぶに足るものなし、未央の諸瓦の漢初に出でて、重んずべきにいずれぞや。

洪武辛亥(4、一三七一)夏、王子充留長安校官、馬懿、張祐この瓦を以て相遺らる、その字に曰く、「長梁未央」と。ここにおいて千六百年の物となす。すなわち貯うるに梓匣をもってし、寶としてこれを用う。ああ物の用たる、固よりその逢うに繋かるおや。

清唐秉鈞『古硯図考』『古硯考』には、洪武王子充以下を除き、「漢より今、乾隆甲午（39、一七七四）、すでに二千年、その宝物たる知るべし、その遭逢、詎んぞ偶然のことならんや」という。また清朱棟『硯小史』二、「未央宮瓦」には、「硯譜云」として再録し、「故名瓦頭研」で終わっている。

安三足爾

円形の三足石硯や陶硯は、漢代に始まり、晋代に盛行した。図16は、広東深圳の東晋墓から出土した三足の石硯で、中心部はかすかに凹み、口縁に沿って細い貯水槽の溝が刻まれている。²⁾

図17は三足の陶硯の例、広東省韶関市河西十号墓から出土した青釉硯で、「永和二年八月十日立作」の銘文の墓磚と共に発掘された。口縁に一道の凹槽があり、内底は前図とは逆に少し高いという。³⁾

註

① 竹島卓一『营造法式の研究』三「用瓦制度」一八七頁、様図二二三、中央公論美術出版社、一九七二

この資料は京都大学上原真人教授の示教による。上原先生、並びに紹介の労をとられた本学酒井龍一教授に、心から感謝したい。

② 円形、三乳足、石灰岩製で硯面周辺に弦紋がある。硯面は光沢があるが、背面は刻削の痕跡がある。高さ二、足の高さ〇・六、直径十一センチメートル。

「深圳市南頭東晋南朝隋唐墓發掘簡報」『深圳考古發現与研究』深圳博物館編、北京文物出版社、一九九四
楊豪「広東晋南朝隋唐墓葬」『広東出土晋至唐文物』二〇頁、図九、広東省博物館・香港中文大学文物館、一九八五

③ 『同』一一八頁、図十八

右の資料は香港中文大学附属文物館館長、高美慶教授の配慮による。永年の厚誼にもとづく教授の御芳情に心から感謝する。

墨称螺製、必如蛤粉、此又明用凹研也

墨の螺製と称するは、必ずず蛤粉のごとくす。これまた明らかに凹研を用うるなり。

螺という古墨を使うには、決まって蛤の粉をとくと同じようにする。これもくぼんだ硯の効能なのだ。

白色顔料の粉を水に溶かしてねる、墨丸も同様なのであって、硯のくぼみはそのために有効だというのである。中田先生の風字硯についての解説は、右の一条の解釈にも相当するので引用させていただく。

むかしの墨は松煙墨で、質もやわらかいので、硯面において墨を磨るということは重要なことではなく、むしろ墨の粉を水に溶かして墨汁をつくって、凹みにためておくのが目的であったと考えられる。⁽¹⁾

次項の「螺は近世の堅きにしかざるを恐る。ほとんど磨るべからず」と相応するものだろう。

註

(1) 「文房清玩史考」十五頁、『中田勇次郎著作集』第七巻、二玄社、一九八六

墨称螺製

米芾は『硯史』にも螺墨についていっている。

古墨に螺(ら)と称するあり、亦近世の(墨の)堅きにしかざるを恐る。しからざればほとんど磨(す)るべからざるなり。

「最近の墨とくらべて、柔かくてすることができないのではないか」と心配している。これから見ると、実物を試すことも、手にとつて見ることもなく、伝聞によって書いたと知られる。当時は南唐以来、宋初に続いた名墨の李廷珪が評判だったのだが、李墨には一言も触れず、伝説の古墨を引いている。彼の徹底した尚古趣味と現実否定がのぞいている。

螺製

螺は巻貝の一種、にな。墨丸の形をたとえたもの。図18は、広州象岡、南越王墓出土の前二世紀の石硯と墨丸。直径一センチ内外、厚さ二ないし四ミリメートル、色は黒く、うす赤みを帯びて、周辺はそっている。魏鄭道元『水経注』一〇、漳水に、

(鄴都)銅雀台に樓を作る。巔に翼を舒べること飛ぶがごとく、…北を冰井台という。高さ八丈、屋は百四十五間あり、上に冰室あって、室ごとに数井あり、井の深さ十五丈、冰と石墨とを蔵す、石墨は書すべく、又これを燃やすも尽くし難く、亦これを石炭という。

とある石墨、天然の鉱物を粒丸に加工したものが墨丸と考えられる。この石墨については、宋晁貫之『墨経』松に、

古は松煙石墨二種を用いしも、石墨は晋魏より以後、聞ゆるなし。

という通り、松煙墨が主流となったため、石墨は廃止されて、六世紀以降は跡を絶った。文献にも魏晋には墨丸と

よばれているが、以後は墨丸の記事は稀で晁貫之の主張を裏付けている。⁽²⁾ 文献によれば、螺は墨丸を数える単位である。ただし、北宋時代は遺品には会えずとも、知識としては通行していた。米芾もその一人であり、米芾が表を書いている、⁽³⁾ 朱長文の撰述した『墨池編』六にも、伝聞の記事が載せられている。

昔陶侃、晋帝に残紙三千枚、墨二十九丸を献ず、みな精妙を極む。かくて、

明陶宗儀「南村輟耕録」二九「墨」

魏晋の時に至って、始めて墨丸あり、すなわち漆煙松煤を夾和して、これをつくる。

は不正確な記述である。⁽⁴⁾ また右に続く「輟耕録」の記事、

晋人の凹心硯を用うる所以（ゆえん）は、墨を磨って瀋（墨汁）を貯えんと欲すればのみ。自後螺子墨あり、亦墨丸の遺製なり。

も、米芾所説の孫引きと理解される。

宋代には墨に硯に関する著述と並行して、墨に関する論考も現われた。⁽⁵⁾ しかし、螺墨について言う者は他になく、すべて上述した李廷珪はじめ、宣州、歙州の名墨についていうばかりである。流行に眼をそむける米芾は頑強である。

註

(1) 『中国・南越王の至宝』特別展図録、毎日新聞社、一九九六

(2) 「陸雲与兄平原書」 曹公藏石墨数十万片、云：兄頗見之不、今送三螺、

千宝「搜神記」四、益州之西、雲南之東、有神祠、：諸祈禱者持二百錢、一双筆、一丸墨、置石室中、

蘇易簡「文房四譜」五 「汲太子妻与夫書」 曰并致上墨十螺、

「同」 「筆勢中」 石崇奴券曰、

張金好墨、：寫書超壹非草書、云十日一筆、月數丸墨、

「東宮旧事」 皇太子初拜、給香墨數丸、

朱長文「墨池編」六 「墨」 偽蜀有童子某者、能書、孟氏召入、甚佳其穎悟、遂錫之衣服乃墨一丸。

(3) 「梁剛先生墓表」 「宝晋英光集」七、朱長文は元符元年(一〇九九)死去、米芾は当時四十九歳。

(4) 「南村輟耕錄」は、漆煙松煤(すず)を和した、製墨法以前の天然の酸化マンガンの素材による墨丸を知らずにいる。墨の製法の歴史的経緯については、蔣玄怡「中国絵画材料史」(上海書画出版社、一九八六)九五―九七頁を参照。

(5) 晁貫之「墨經」、李孝美「墨譜」、何遠「墨記」(「春渚紀聞」所収)、葉夢得「避暑錄話」上

蛤粉

はまぐり、しおふき、かきなどの貝がらを粉末にした古代の白色顔料。膩粉、鉛粉に比して変色せず、光沢があるために「最も妙」(清蔣驥「伝神秘要」用粉)と評価された。

一時期製法が中断されたこともあったらしく、

古は蛤粉を用う、今は製法伝わらず、竟に鉛粉を用うるにしかず。

瓊論「乾隆46、一七八二」

(清沈宗霽「芥舟学画編」四 「設色

ともいわれているが、前引「伝神秘要」「用粉」の注記には、

蛤粉の製法、先ず殻上一層の黒皮を去淨し、極細に研してこれを用う。

といい、『芥舟学画編』に先立つ王概『芥子園画伝初集』（康熙18、一六七九）には、次のようにいう、

古人はたいてい蛤の粉を用いた。その製法ははまぐりの殻を焼きぬいて、細かに磨りつぶし、それを水で解いて用いる。現在でも福建省管内の福州、興化、泉州、漳州の四府の民家の白壁は、多くは蛤の殻の灰を石灰の代用にしており、なお古風を存している。しかし今日では画家はたいてい鉛粉を用いる。（『青在堂画学浅説』傳粉）¹

さらに現代画家于非闇（一八八九—一九五九）に、より具体的な製法の記述がある。

蛤粉、また珍珠粉ともよぶ。これも古代民族絵画に重用された顔料である。宋代絵画はすべてこれを白堊の代用として使っている。製法は海中の蛤の中から殻の堅く厚いもの、殻の口が紫紅色のものを選んで、とろ火で焼いて石灰質を作る。極細に研磨して白粉とし、水を注ぐと、貝灰は消石灰に変成するから、膠を加えて使用する²と、永久に変わらない。

註

- （1）青木正児訳註、入矢義高校訂『芥子園画伝初集 山水樹石』下冊 三三頁、筑摩書房 一九七五
 （2）于非闇『中国画顔色的研究』六一七頁、朝花美術出版社、一九五五

一 援筆、因凹製鋒已圓、書画安得不圓

ひとつたび筆をとれば、凹製によって鋒すでに圓、書画いづくんぞ圓ならざるをえん。

いったん筆をとるとなると、硯がくぼんでいるものだから、筆の穂先は充分円くなっている。この筆を使ってできる書画が円くならないわけではないのだ。

107条の書き出しにいう、「古書画が皆円いのは、器一硯のおかげなのだ」という主張を、前半の終わりに繰り返して、駄目押しをしているのである。「凹製によって筆は円」に相当する中田先生の解説を引く。

(風字硯の) 中心はくぼんで斜めの姿勢になっているので、筆鋒に墨をふくませるとき、筆の鋒のまわりに十分よく墨汁がふくまれて、それによって書かれる書畫も、むっくりと筆の全体に墨のふくまれたものができあがって、一方にかたよったりしない。¹⁾

「書画皆圓」を「むっくりと筆の全体に墨のふくまれたものができあがる」とするのは、先生の名訳と思う。これは米芾の実作者としての体験から生まれた、鋭い省察の記録に相違ない。しかし、後世の書画家にとっては「筆先きが円くなる」は、必しも通用しなかったことらしい。米芾に対する賛否の意見は皆無に近く、提言は無視されている。

註

(1) 「文房清玩史考」十五頁、『中田勇次郎著作集』第七卷、二玄社、一九八六

本朝研始心平如砥

本朝の研、始めは心平にして砥のごとし。

わが宋朝の初期の硯は、中央が砥石（といし）さながらにまっ平らだった。

援筆則偏 故字亦偏

ひとたび筆をとればすなわち偏、故に字も亦偏なり。

いざ書くとなると、筆はかたよって（入矢先生訳、「筆先が角はってくる」）、それで字もいじけてしまうことになる。

硯が平らなばかりに、筆先は偏（かたよる、せまくなる）となり、その結果、字も偏となる、というのである。清人に祖述した文章がある。

呂留良『天蓋楼硯述』『鳳池硯』

今の硯面は平らなれば、一たび蘸墨（筆に墨をしみこませる）すれば、筆鋒は或いは扁、或いは側なるがごと

し。これその古制にしかざる所以。これ筆墨に精しく、用硯に善なる者にあらざれば、知るあたわず。

呂留良には米芾の真意は理解できなかったようだ。なぜ硯が平らだと筆は扁になるのか、それを避けるにはどうしたらよいか、わかっていない。だから心凹や筆の理論には発言できずに「古制にしかず」（古いものの方がよい）という、訳のわからない要約で終わっている。そして書画論の常套で、悪い癖なのだが、「物の道理を知る者、または努力する者でなければ、この話は理解できない」という一方的な説教で話は終わりになっている。董其昌とて同じである。

『画禅室随筆』二 古人論画にいえるあり、下筆には凹凸の形あり、これ最も懸解、吾はこれをもって高く歴代に出づる処を悟る、至るあたわずといえども、ねがわくば、これに効ってその百一を得、自ら老いて丘壑の間に遊ぶに足らしめん。

凹凸の筆法を体得して米芾の域に達し、後は自適の生活を送りたいというのが、その真意の概要であろうか。だが、硯面の凹凸と筆鋒の円という理論は消去されている。今一つ、

作（倪）雲林画、須用側筆、有輕有重、不得用圓筆、其佳处在筆法耳、

倪瓚の画を倣うには、圓筆は使えないというのは、一般論でなく米芾に対する反駁であろう。次の側は、「圓筆によつてはじめて奥義に到達できる」と米芾の意を受けているように見えて、「四面圓厚」の引き方からいって『画禅室随筆』を下敷きしている。米芾より董其昌を選んだということだろう。

清華琳『南宗扶秘』 昔人論画有云、作画用圓筆、方能深造、為四面圓厚也、此說非善學者、亦不易解也、また次の例では、扁筆、圭角からみて、107条の扁、三角を意識していることは疑いない。

清唐岱「絵事彙徴」「筆法」 能用筆鋒、則落筆圓渾不板、否則用筆根、或刻或扁、專以扁筆取力、便至妄圭角、

しかし、ここでも董其昌、華琳同様、硯の凹凸に対する観察は消えてしまつて、「筆の根元を使うのはよくない」と初心者向きの体験的な解釈へと方向を変えている。

107条の米芾の主張は、明清の論画に多様な影を落としている。しかし、原点となった『画史』の根本的な事項については誰も触れようとしていない。米芾受容のあり方の典型を物語っている。

唐詢、字彦猷、始作皴心凸研

唐詢、あざなは彦猷、始めて皴心の凸研を作る。

唐詢（景德二—治平元、一〇〇五—一〇五四） 真宗時の竜圖閣待制、知審刑院だった唐肅の子。初め父の恩蔭によつて将作監主簿に任じられ、仁宗の天聖年間（一〇三三—一〇三九）進士及第となる。以下その経歴については、その著『祝録』の中で語っているので略記する。

慶曆元年頃（一〇四〇） 知梧州（広西）、同三年（一〇四三） 知婦州（湖北）となる。同六年（一〇四六） 知廬州（安徽）に任ぜられるも拜せず。

以後、尚書工部員外郎、直史館、知湖州（浙江）を歴任。

皇祐三年(一〇五二) 西江軫運副使、

至和二年(一〇五五) 右史(起居舍人)

嘉祐三年(一〇五八) 知蘇州、礼部郎中、知制誥。同五年(一〇六〇) 知杭州(浙江)から吏部郎中。

同六年(一〇六一) 知青州(山東) 夏四月から八年三月まで、職工数十人を指揮して硯石大小五十余を得る。後、翰林侍読学士、右諫議大夫に累遷、ついで勾当三班院判太常寺、給事中に進む。治平元年に卒し、礼部侍郎を贈られる。

文集三十卷があり、好んで硯を収集し、来客があると、硯を示し愛玩を共にしたという。『硯録』二巻の著がある。

【宋史】三〇三三

宋朱長文『読書断』下には、字を彦游に作るほか、卒年も右と異なる。以下全文を示す。

宋の唐詢、字は彦游、仁宗に事えて内は禁近を歴、外は方面を治め、文雅と政事をもって顕わる。嘉祐中(一〇五六—一〇六三)、侍読学士をもって卒す。筆迹はすこぶる適媚、すこぶる欧(陽詢)の行書を学ぶ。奇硯に富み、精紙佳筆にあらざれば、妄りに書せず。

伝えられるエピソードが二つある。

宋王闢之『澗水燕談録』 唐彦猷、清簡寡欲、世務をもって意をなさず、公より退いては一室に居り、蕭然として終日黙坐し、ただ吟詩臨書、烹茶試墨、これをもって日を度る。嘉祐中、青(州)に守たるとき、糸石を里山に得、琢いて硯となす。その理は紅黄相参わり、文は林木のごとく、或いは月暈、或いは山峰、或いは雲霧花卉のごとく、石自ら膏潤、墨色を浮かぶ。覆うに匣をもってすれば数日乾かず、彦猷『硯録』を作って、品第一

となす。おもえらく「この石を得ては、端溪龍尾皆置いて復た視ず」と。

宋江少虞「宋朝事實類苑」五二 「弁画絹」 唐彦猷侍読詢、弟彦範詔、ともに一時の才雅の誉れを擅まます。…忽として一客の黄筌「梨花臥鶴」を携うるあり、…彦猷蓄画最も多し、篋を開き蜀の趙昌、唐の崔驛ら数名花とを較ぶるに、ともに及ばざる所あり、題にいわく、「錦江釣叟黄筌筆」と。彦猷その半ばを賞し、よって暫く齋中に留む。少しくその絹色を玩ぶに、晦淡酷はだ縑に類す。彦猷その図の角に巨印あるを訝しみ、徐ろに潤して掲げてこれを窺うに、すなわち「和買絹印」なり。彦範世故を知る、大いに笑っていわく、「和買は祥符の初（大中祥符、一〇〇八一—一〇一六）に始まる、王勉の潁州（安徽）に知たる歳、大いに饑ゆ。府錢十方縑を出だし、民と約していわく、来年蚕熟のときは、每貫一縑を輸せと。これを和買といい、これより例となす。黄筌は唐末の人、これ後人の矯為（偽作）なり」と。遂にこれを選し、その誣を受けず。

その子唐炯、字は林夫（『宋史』三二七）とは米芾は交游があり、『画史』161に自蔵の徐熙「風牡丹図」をもって、林夫の硯と交換したという。この硯は、宋高似孫「硯箋」三、「丹石硯」の注記に、

後に元章、徐熙の牡丹図をもって唐林夫の硯と易う。

とあるものに相当する。丹石硯とは高似孫の「硯箋」に、

唐林夫、丹石硯を遺す、粲然として芙蓉の出水のごとく、墨を殺ぎ筆に宜し、唐氏の譜の天下の硯、この石の銘にしかざるなり、

という。その銘文は高似孫の注記に、

彤池紫淵出日所浴、蒸為赤霓以貫陽谷、是生斯珍非石非玉、

とみえる。

註

（1）宋王闢之『澠水燕談錄』『雜錄』には少しく異同の故事を伝える。

祥符初、王旭知潁州、因歲飢出庫錢貨民、約蚕熟、千輸一緡、其後李士衡行之、陝西民以為便、今行於天下、於歲首給之、謂之和買絹、或曰預買、始於旭也。

皴

『硯史』の末尾、「様品」の章では、最多の文字が費されて、多くの硯の形状が語られている。だが、つまるところ米芾の主張は、「心凹の古硯」、中心部のくぼんだ晋唐の古硯を絶佳とし、他は一切排除するという価値判断に終始している。『画史』107が「様品」の要約だとさきに行ったのは、この理由による。皴は硯の平面の比喩として使われている。明張自烈の『正字通』によると、

皴、今の餅を烙く平鍋を餅皴という。

といい、『説文句読』には、

皴、面円にして平、三足、高さ八寸ばかり、餅皴なり。

という。『西清古鑑』には、盤に五徳のような足をつけた器が載せられている。(図19) 知れきった日常の雑器のためか、米芾にも改まった説明はない。そして実はこれがよくわからない。

『硯史』様品 其晋銅硯雖如鍤、然頂殊平…梁傳大夫磁硯、心如鍤、環水如辟雍之製、とあるのを受けて、

清謝慎修『謝氏硯考』「硯図」四に、

辟雍硯、今圓くして杯のごときものあり、中は隆く水を起こして、これを環る、辟雍と名づく。

という。図20は、広東省番坑四号墓出土の唐硯で、ふちに沿って環溝がある。ただし、謝氏のいう「中は隆く」なく、逆に低くなっていて、辟雍硯でありながら、米芾のいう「心は鍤のごとく」凸状になっていない。図21、別の辟雍硯では、中央は盛り上り深く幅のある環溝がめぐらされている。実測の数値は不明だが、「小田資硯」という以上、前に引いた謝氏の「円くして杯のごとし」とは、このようなものをさすのかもしれない。

辟雍は周代の天子の大学の名という。東西南北四方の大学の中央のものを辟雍と呼んだ。『三輔黄図』に、「璧の圓なるにかたどる、これを雍（擁）するに水をもってするは、教化の流行にかたどる」といい、学校の周囲を水流で円くとりかこむところから、名が起こったという。

しかし、米芾にとっての鍤は軽侮の対象としての比喻であろう。彼の引く鍤字のニュアンスは「この役立たずめが」という軽侮の念がある。そうとしか受けとれない。鍤を引いて硯を論ずる文章は、後世に一篇もない。後の学者は暗黙のうちに、鍤のもつ敵意の響きを感じとっていたのである。とすると、『画史』の文体について改めて考え直す必要があるだろう。一見まじめで地味な論議にも、米芾の人柄に直結する揶揄嘲笑の気分が入りこんでいるのである。

註

(1) 前出『広東出土晋至唐文物』一九八頁、図77

(2) 前出、桑行之等編『説硯』口絵第一頁

始作鐵心凸研

「鐵（いりなべ）のごとき、中央部の盛り上がった硯を唐詢が始めて作った」という記事は、『硯史』『様品』にいう、

けだし古硯は皆心凹、後にはすこしく正平、いまだ凸なるものあらず、始めて侍読学士唐彦猷、紅糸の辟雍硯を作る¹。心高凸にして馬蹄様を作るに至って、亦心凸、磨墨の溜の身に向かって出ずるに至る。

に相当する。

鐵心の凸硯という実例は見出しにくい。おそらく湖南省長沙の東郊、楊家山の南宋、王權墓出土の灰黒色の石硯のようなものではあるまいか。(図22) 硯面の厚さは三・五ないし三・八センチメートルと記録される²。つまり○・三センチの高低が、ゆるやかなカーブを作って刻されているわけである。前方には小さな墨池があり、硯面からの通路が設けられている。これでは墨は筆に充分まわることは不可能であって、米芾のいう不便、不満の言い分は理解できよう。

註

(1) 紅糸石は硯材の第一にあげられて珍重されている。唐詢にしてみれば、最高の石で理想的な硯を作ったという喜びと自負があったに相違ない。米芾はそれをけなししているのである。

宋無名氏『硯譜』『紅糸石』 青州(山東)紅糸石、外有皮表、磨髀即其理紅黃相參、(石)理黃者、其糸紅、理紅者、其

糸黃、須飲以水使足、乃可用、不然渴燥、唐彦猷甚奇此石、以為發墨不減端石、蓋物之奇者必異其類也、

清謝慎修『謝氏硯考』『硯品』 按姚寬西溪叢語、歐公硯譜以青州紅糸岩為第一、此硯多滑、不受墨、若受墨妙不可知。

『同』『補遺』『紅糸石』 唐李石統博物志、硯譜載天下之硯四十余品、以青州紅糸石為第一、端州斧柯山石為第二、歙州

童尾石為第三 (謝慎修は「按ずるに譜とは即ち文房四譜」と白註を加えているが、これは思い違いで、唐詢『硯録』である)

『中国文物精華大辞典』金銀玉石卷、雜項篇の13に、ひときわ美しい唐箕形紅糸石硯の図版がある。「紫地紅糸、彩雲の石理があり、長さ一三・七、幅九・七、高さ三センチメートル」。(国家文物局主編、上海辞書出版社、香港商務印書館、一九九六)

(2) 「長沙東郊楊家山発現南宋墓」『考古』一九六一年第三期、一四八一—一四九頁、背面に篆書の「萬」字のあることから、萬字硯とよばれる。

本朝研、始心平如砥、…唐詢始作鐵心凸研、

右の簡単な宋硯の展開について、『硯史』『様品』には詳しい沿革が述べられている。

本朝、穹高腰瘦、刃は濶く鉞斧の状に變成す。仁朝已前の硯は、多くこの製に作る。後やや少なし。

資政殿学士浦伝正は、真宗用いる所の硯を収む、仁廟の駙馬都尉李公炤に賜わりし、鳳池硯の形製と一に同じ。

今に至るまで尚方はこの形製多し。国初以来の公卿家に往往これあり。

仁宗已前の史院に賜わりし官硯は、皆端溪石。純は薄く、上は狭く下は濶し、峻直にして足を出さず、中は坦夷にしてなお鳳池の像あり、或いは四辺に花を刊(けず)り、中に魚や亀をつくるものあり、およそこの形製は端の下岩の奇品多し。

嘉祐末の硯様、すでに大指のごとく粗、心は甚だ凸にして意は渾厚を求む、…純斗はもとより勒むこと深し、…心凸、始めて侍読学士唐彦猷紅糸の辟雍硯の心高凸、馬蹄様を作りしより、亦心凸。

冒頭にいう、「頭部が弓なりに高くなり、胴は瘦せ、刃の広い斧鉞の形」とは、『西清硯譜』に載せる宋藤村石鳳池硯が参考になる。 (図23) 米芾は仁宗以前はこの形が多いという。宋硯にこの形製の硯がみられるのは事実である。⁽³⁾

また明清二硯譜の鳳池硯の図は、その形が崩れていて、イージーな図柄になっている。宋硯の姿の訛したものと理解される。(図24)

註

(1) 蒲宗孟、伝正はその字。仁宗朝に太子少師を贈られた蒲師道(一〇〇八一—一〇五三)の子。四川新井の出身で皇祐五年(一〇五三)の進士、神宗朝の尚書左丞。(『宋史』三三二—三三八) 蒲伝正の真宗所用硯は、もしも下賜の品であるなら、その生卒から考えて、父の代に得たものであろう。

(2) 仁廟は、北宋第四代の皇帝仁宗(在位一〇二二—一〇六五)。李公炤は仁宗の娘、兗国公主を尚して駙馬都尉に登った李璋、公炤はその字。水墨の竹石画を善くし、章草の飛白や吟詠も善くした。卒後太師中書令を贈られた。画蹟は伝えられていない。『宋史』四六四)

(3) 『文物』一九六四年 第一期から六五年 第十二期まで、毎号硯史資料が登載され、湖南、陝西、上海、洛陽など各博物館の蔵硯についての特集も収める。

(4) 『謝氏硯考』の図の左は、異体であるが、唐詢『硯録』にいう、「外は皆正方、別にその中に台を作る、これを墨池という」に相当すると考えられる。

米芾の主張する宋硯の編年の信憑性は、まだ確認に至らない。しかし、嘉祐八年（一〇六三）唐詢によって硯面の高さに激的な変動が起こった後、持続したという部分は、遺品に徴する限り、あまりに武断に過ぎて通用しないと考える。米芾のいう、宋初はみな砥石のような、また嘉祐以後は凸面状の硯ばかりだというのも、事実に反する。図25は、唐詢制作の後の熙寧八年（一〇七五）の石硯だが、はっきりとくぼんでいる。図26の年記は不明だが、『西清硯譜』中の宋端石鳳池硯は、中央に広いくりこみがある。伝河北省鉅鹿県出土の洮河緑石抄手硯は、硯面に同心円状の石理があって、それをそのままくぼみに作っている。(図27) 唐詢以後は凸面ばかりだとはとてもいきれないのであって、反証はいくらでもあるのである。

一方、晋唐の古瓦でも中心部の隆起しているものはむしろ多い。東晋の青釉三足硯(図17)などはそれであって、これ一つでも「晋唐皆鳳池硯」という米芾の勇ましい断定は揺らぐものである。また湖南省博物館蔵、西晋三足陶硯も、「硯心ほぼ凸」という。また「長沙兩晋南朝墓發掘報告」八四頁、『考古学報』一九五九年第三期(5)文具、陶硯一件、「円形、池心平坦 下附三蹄足」、石硯一件、「長方形に近し。両端はほぼ弧形を呈す、池心かすかに上に向って凸起す」という。彼の知見に入った硯の数の限界を思わずにいられない。右軍硯の記事を見ても、彼はごくわずかな体験によって断定を続けている。当時としては、それだけでも周囲に誇示するに足る経験であったろうが、現代とは比較にならない北宋時代の情報量の貧しさと、その上持って生まれた彼の性格とが、米芾の文章

を空しいまでに景氣づけているのである。

註

（1）王啓初「湖南省博物館的几方藏硯」 五一頁 『文物』一九六五年 十二期、硯の記事はあっても、硯面の凹凸にまでい
うものは少ない。右はその例外的な指摘である。

云、宜看墨色、每援筆即三角、字安得圓哉

いう、「よろしく墨色を見るべし」と。筆をとることに、すなわち三角、字いづくんぞ円なるを得んや。

唐詢は凸硯を作って、「どうか墨の色をごらんなさい。」などという。ところが、筆をとる段になると、きまっ
穂先は三角だ。（入矢先生訳、「筆先が三角に角ばった形になる」） どうして円い字形などできるものか。

宜看墨色

『硯史』にはより具体的にいう、

唐彦猷作紅糸辟雍硯、心高凸至作馬蹄様、亦心凸至磨墨溜向身出、觀墨色則凸高增浮泛之勢、援毫則非便也、
唐彦猷、紅糸の辟雍硯を作る、心は高凸にして馬蹄様を作るに至る。亦心凸にして磨墨の溜って身に向かっ
て出ずるに至る。墨色を觀ればすなわち凸高にして浮泛の勢を増す。筆を援れば則ち便にあらざるなり。

「墨色を看るべし」という一句は、これだけの内容を背景にして記述されている。「画史」の文章がわかりにくいのも当然である。「筆をとるに便にあらず」、そのことを具体的に示すために、「筆をとることに、すなわち三角となる」という。それにしても三角とは過激な表現である。

註

(1) 『美術叢書』本、「観墨色」を硯墨色に作る。則凸高増を則凹高増に作る。ともに誤まり。

毎援筆、即三角

「筆をとる段になると、穂先は三角になる。三角になるのは、実は硯の方に責任があるのだ」というのが、彼の理屈である。そのことは『硯史』に説明がある。

硯様はすでに大指のごとく粗¹、心甚だ凸、純斗（硯の頭部の縁飾りの中に彫られた方形の水たまり）は、もとより勑（きざ）むこと深く、滯墨は濼（あら）いがたし。心凸の故に、筆を点するも圓ならず、常に三角の簇（やじり）のごとし。

最後の「心凸：故三角簇」を中田先生は、「筆に墨をうけるとき硯に筆をおろすと、表面が凸出しているために、筆鋒の形がやじりのような三角形になり、ふっくりと円い形にならないことをいうのであろう」といわれる。その通りと考える。

また純斗故勑深には、黄欽阿に別解がある。

純斗故勑深とは、刃及び池の故意に陡下して深く陰陽の痕線あるをいうなり。墨溜の身（硯の胴）に向かって

出で、淌(したたり)の辺際に出ず。三角の簇とは筆の開花するなり、中高の故に点筆の常に開花を患うるなり。筆の穂先がカリフラワーのようにばらけるといふイメージをいうのだから、正解ではあるまい。

ヴァン・グリックの英訳は、

always remains like a three - cornered arrow - head .

で原文を直訳しただけのもの。

註

(1) 中田先生は「比喩としての大指は理解しがたい」といわれる。(『末人硯譜十種』) まだヴァン・グリックは逐字訳を示すのみ。the inkslabs were shaped like a thumb.

(2) 所収本、(1)に同じ。

余稍追復其様、士人間有用者、然稍平、革鐵背未至於瓦、惟至交一兩人頓悟者用之矣、亦世俗不能発薬也

余すこしくその様を追復す、士人の間間用うる者あり、然れどもすこしく平らにして、鐵背を革(あらた)めて、いまだ瓦に至らず、ただ至交の一兩人の頓悟の者のみ、これをを用うるのみ。亦世俗は薬を發するあたわざるなり。

私はたまりかねて古硯の復元を試みた。士大夫には使う者もいるけれど、まだ削りが足らず平らである。真平ら

な炒り鍋の底を変えてはみたものの、古瓦の凹みには及ばない。一人二人、最も親密なよく物のわかる者は使っている。一方世俗一般はときたら、これはもう馬鹿につける薬はない。

当時通行の硯に対し、はっきりと彼は不満だった。硯だけではない。硯を変えようとしないう当時の社会に対しても不満だった。「古硯に対しても、このおれに対しても、世間はその善美を正當に認めていない」、「どいつもこいつも盲ばかりだ」、それが107条の結論なのである。

革繳背未至於瓦

宋高似孫「硯箋」一「製法」に「米氏書史」の割注とともに次を引く。高氏の杜撰な引用の例である。

本朝硯心平如研、援筆則偏、彦猷作繳心凸硯、援筆即三角、作字安得圓哉、余復其樣稍革繳背。

「画史」を読まない者には、到底不可解な行文だが、米芾の復元は炒り鍋の底を細工するのだと、高似孫は考えていたらしい。高氏は107条を寸断して引用しながら、意味をほとんど理解していない。また元蘇霖「書法鉤玄」「米芾論書」に、

智永硯、臼を成して、すなわちよく右軍に到る。もし穿透すれば始めて鍾索に到る。勉めざるべけんや。

というの、右の条を踏まえている。「智永硯成臼」は、「書史」「硯史」にいう、

余収晋硯一、智永硯一、心如臼（「硯史」では中亦成臼に作る）

に基き、後半は107条によっている。「墨をすることで硯を臼のように磨滅させたなら王羲之までも至りつくことが

でき、更に硯を突き破るほど、墨をすって学習すれば、鍾繇、索靖の域に及ぶことができよう」と演繹しているが、ここでも皴は全く姿を消している。元朝に入っても、『画史』の真意を把握できなかったことを示す一例である。

発葉

葉石を開いて、その蒙を治癒する。葉になるような教えを与える。『莊子』『列禦寇』列子…及于門曰、先生既来、曾不発葉乎。

入矢先生訳は「処方する」。

「世俗の手合いなぞ治癒できっこない」の同時代の類似の例に、次がある。

『山谷題跋』五 書繪巻後…俗使不可医。

『蘇東坡詩集』九 「於潜僧綠筠軒」 無肉令人瘦、無竹令人俗、人瘦尚可肥、士俗不可医。

おわりに

「米芾の足音が聞こえる」、この論文の執筆の際中に幾度となくそう思ったものだ。『画史』の晦渋な文字の背後には、広大なメッセージが隠れている。107条と『硯史』との関係のように、『硯史』のような事実を知らなければ、『画史』の翻訳はおぼつかない。もとより、『硯史』のような都合のよい資料が、いつでもあるわけではない。しかし、107条で学んだ方向と方法は、今後の指針として動かない。この小論の作業が苦しかっただけに、今の喜びは大きい。

貴重な書物を寛厚に貸与して下さった下野健児先生、宇佐美松鶴堂林煥盛氏、京都大学研究生黄貞燕碩士、無躰な質問に快く教示された上原真人、林巳奈夫両先生、グリックの『硯史』英訳の複印や、107条の英文訳を恵授されたハイデルベルク大学ローター・レダローゼ (Lothar Ledderose) 教授、各文の句読訓点をつけて下さった上、多くの指教を賜った入矢義高先生、広東出土の硯についての資料を、快く教示された香港中文大学高美慶教授、またこの文章を継続するよう、不断に激励されたフリア・ギャラリーのトーマス・ロートン博士 (Dr. Thomas Lawton) の皆さんに衷心の感謝を捧げる。御好意の一つでも欠けたなら、米芾の足音は私には聞こえてこなかっただろうから。

(文化財史科学専攻 教授)

風
羲之

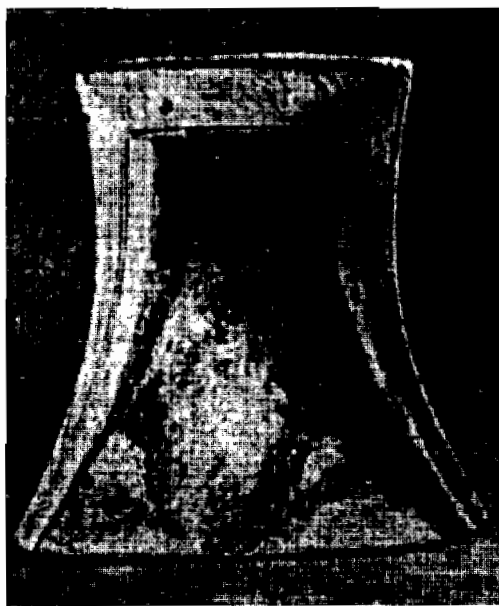
風
懷素

風
王羲之

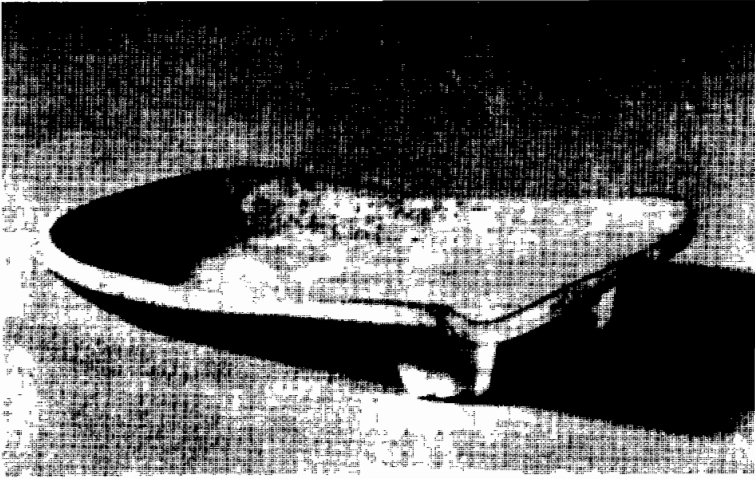
鳳
蘇軾

鳳
顏真卿

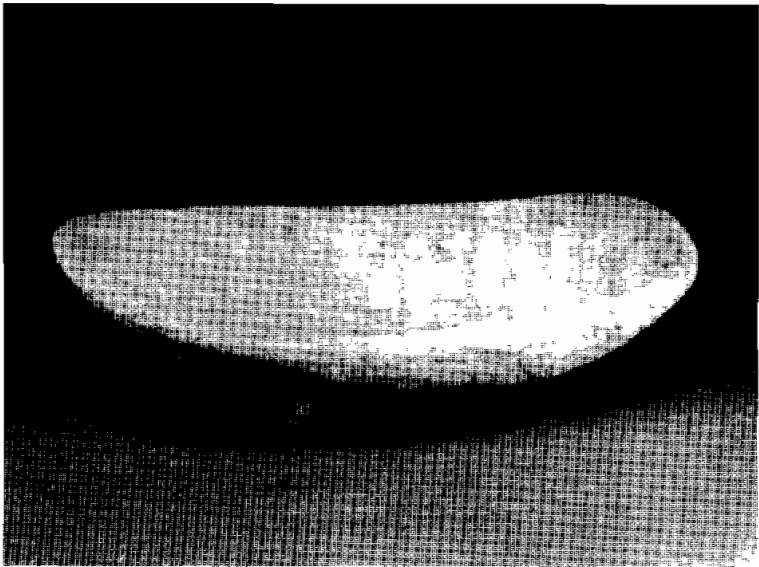
1 鳳と風字



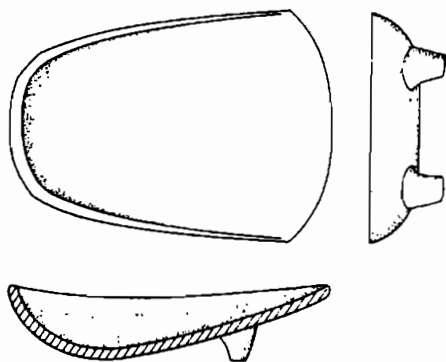
2 唐 箕形陶硯（陝西省博物館）



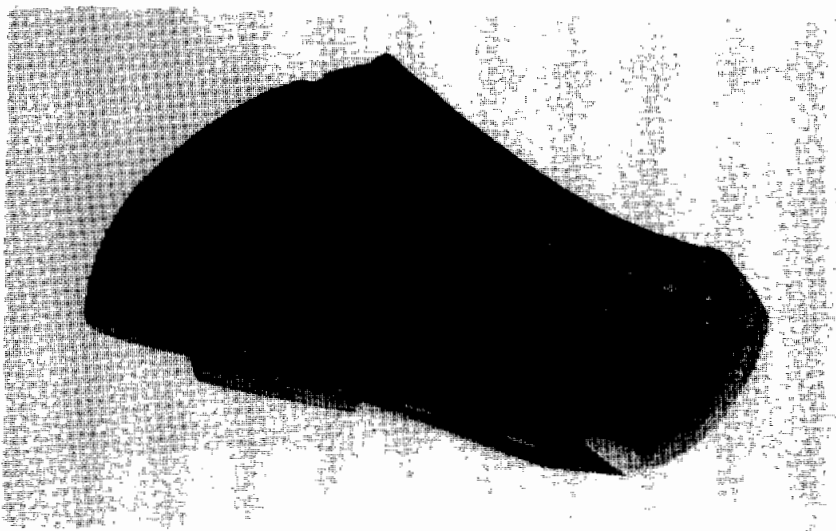
3 唐 陶硯 (陝西省博物館)



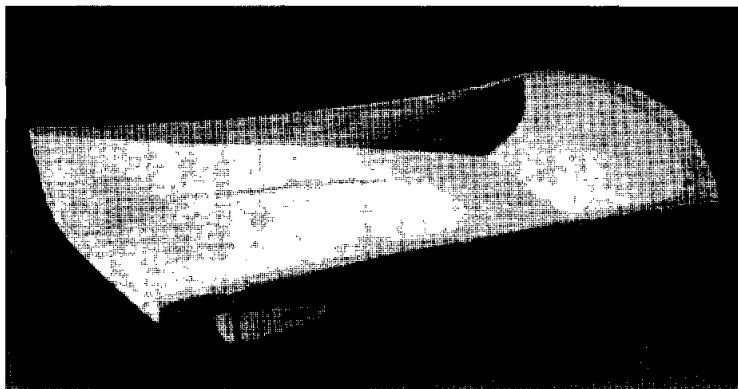
4 - a 唐 風字硯 (廣東省博物館)



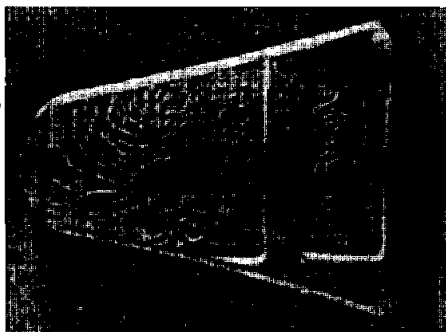
4 - b 唐 風字硯 測量圖



5 唐 箕形紫石硯 (天津市藝術博物館)



6 唐 箕形歛硯 (安徽省博物館)



同 背面

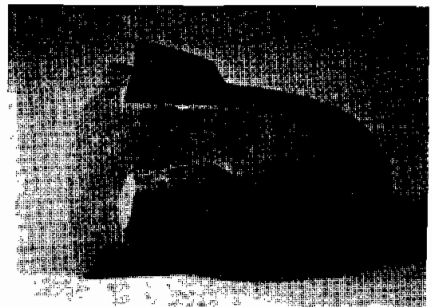
7 東魏 武定七年銘 箕形陶硯 (陝西省博物館)



8 白 石製明器（洛陽燒溝出土）
林巳奈夫編《漢代の文物》より



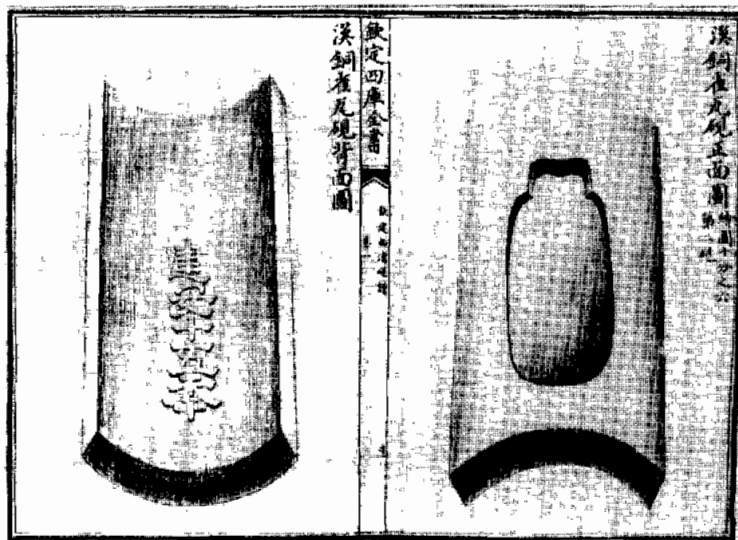
9 - a 唐 端石兩足硯（湖南省博物館）



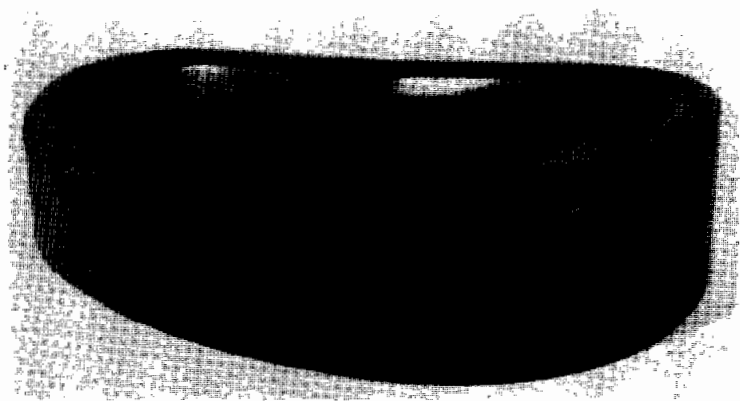
9 - b 同 背面



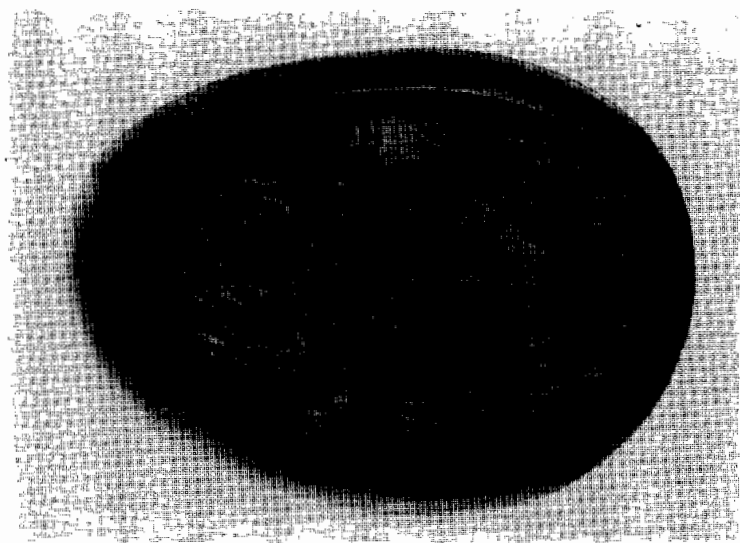
10 晚唐 箕形陶硯 (洛陽市博物館)



11 銅雀瓦硯 《西清硯譜》卷一



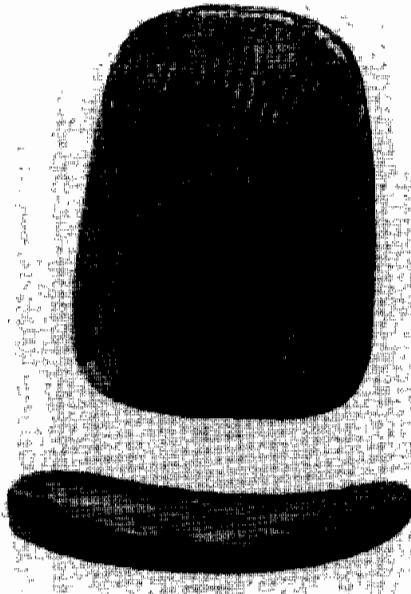
12-b 法隆寺献纳宝物 瓦硯 背面



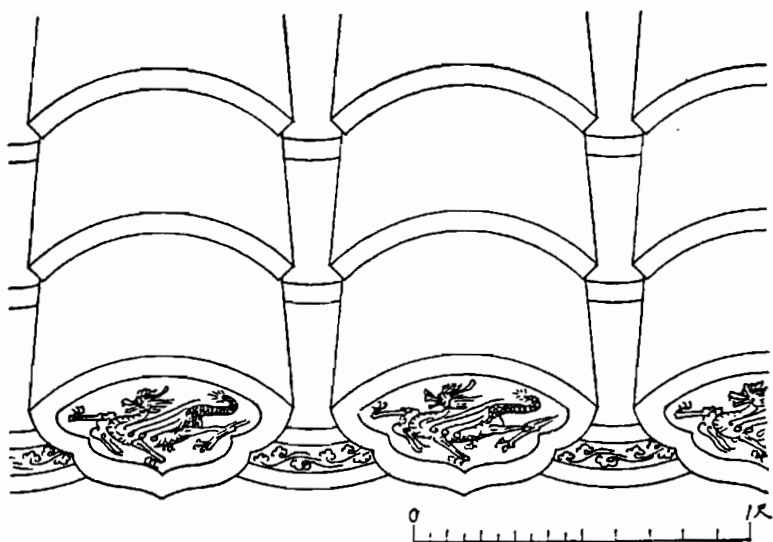
12-a 法隆寺献纳宝物 瓦硯



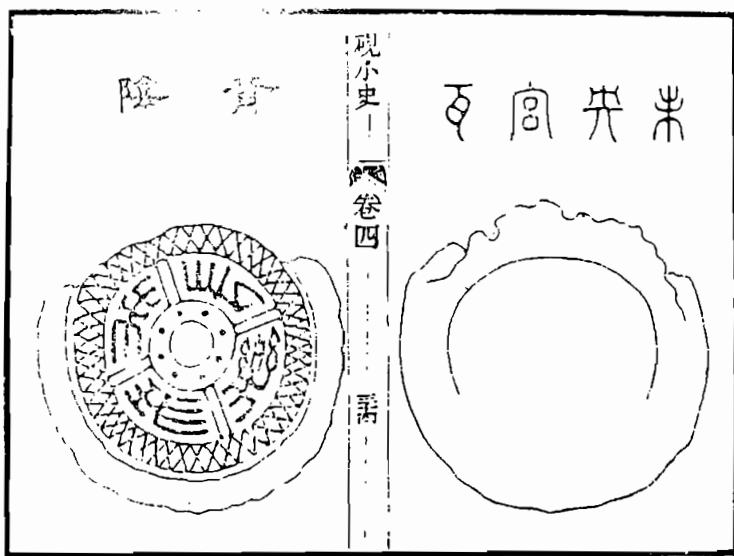
13-a 法隆寺献纳宝物 瓦硯



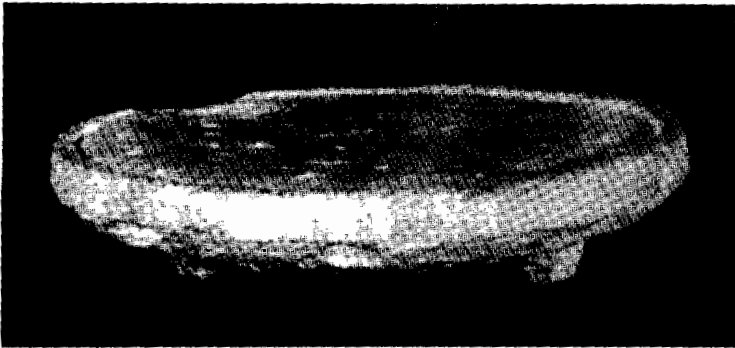
13-b 法隆寺献纳宝物 瓦硯



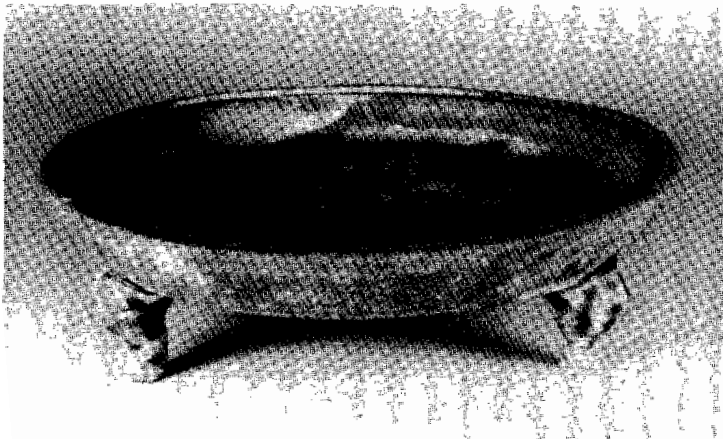
14 垂尖華頭瓦推定図



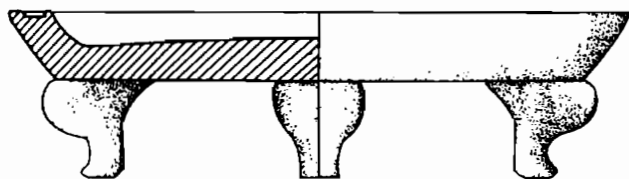
15 未央宮瓦硯 清 朱棟《硯小史》四



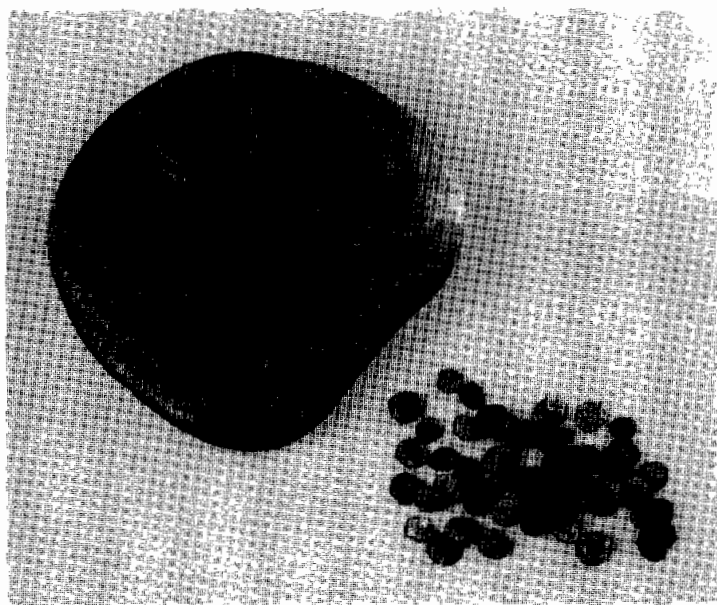
16 東晋 楕円形石硯 (広東省博物館)



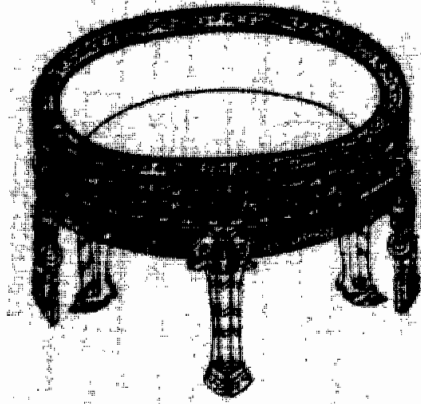
17-a 東晋 青釉三足硯 (広東省博物館)



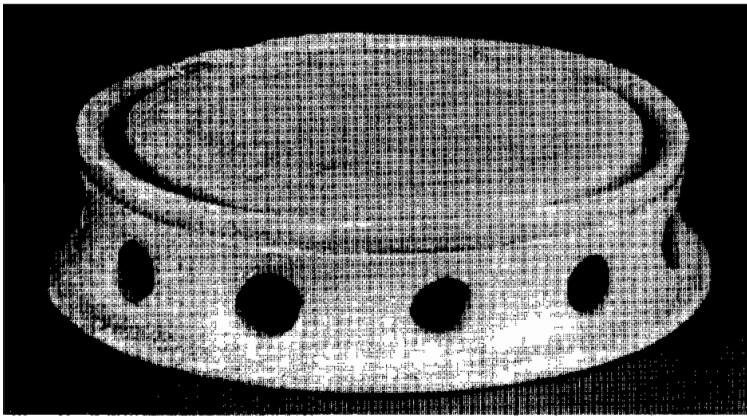
17-b 東晋 青釉三足硯断面図



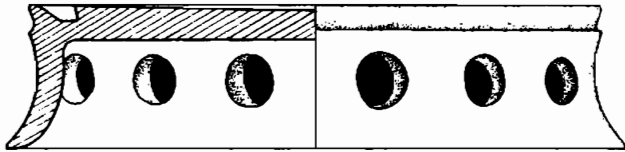
18 西漢 石硯と墨丸（広州象崗南越王墓博物館）



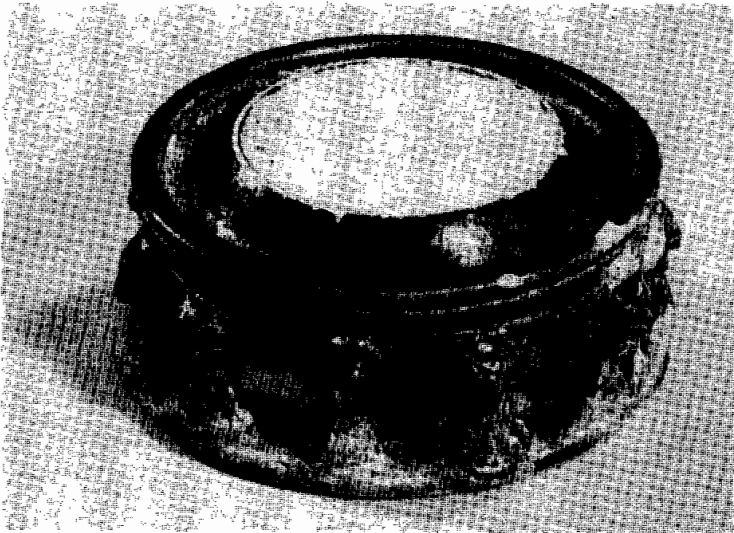
19 盥 《西清古鑑》



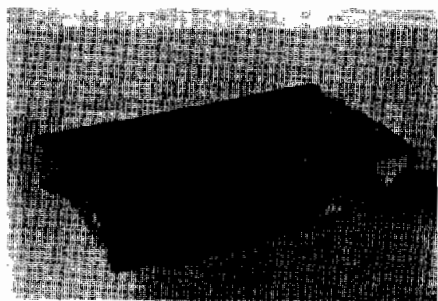
20-a 唐 青瓷辟雍硯 (廣東省博物館)



20-b 唐 青瓷辟雍硯断面図

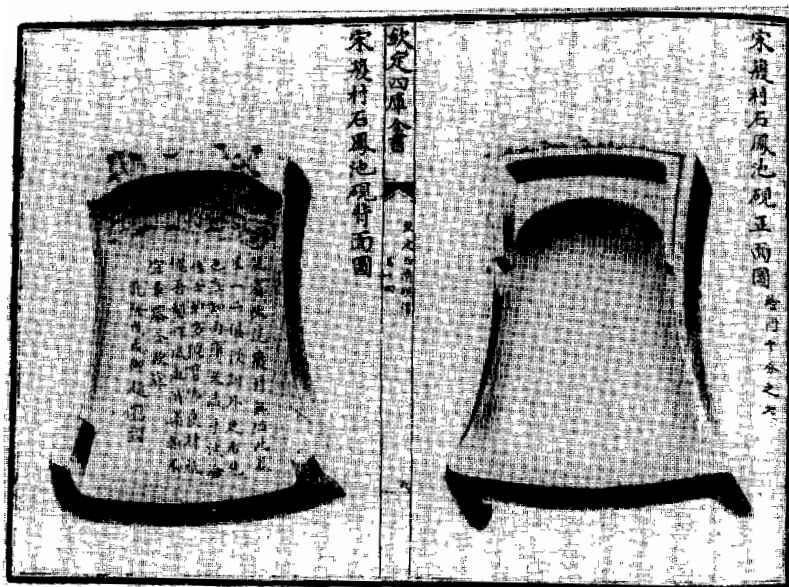


21 唐 緑釉獸脚連座小円瓷硯

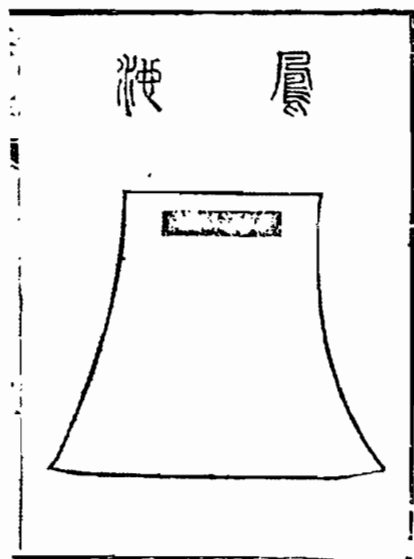


22-a 宋 萬字陶硯 (湖南省博物館)

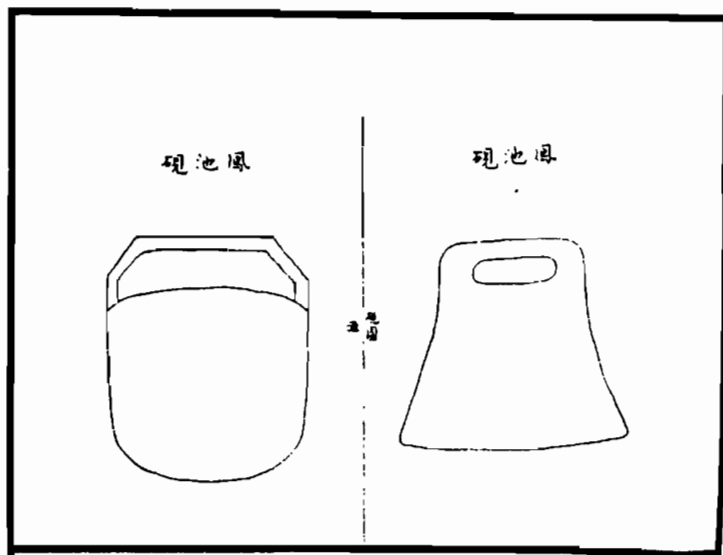
22-b 同 背面



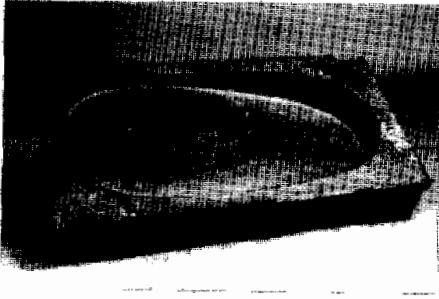
23 宋 穫村鳳池硯 《西清硯譜》卷十四



24-a 鳳池碗 明 温博《硯譜》欣賞編

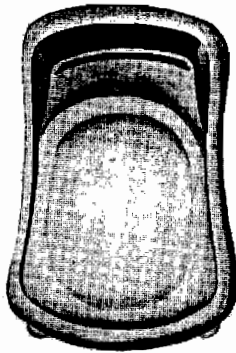


24-b 鳳池碗 清 謝慎修《謝氏硯考》硯圖



25 宋 熙寧八年石硯 (常州市博物館)

宋端石鳳池硯正面圖



26 宋 端石鳳池硯圖 《西清硯譜》卷十四



27 宋 洮河綠石抄手硯（安徽省博物館）